

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第4号

「ままごと」の新聞」は、柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2013年1月16日
発行元：ままごと

「街と演劇」

そして船は行く

柴 幸男
Yukio Shiba

2012年は、3本の新作公演を行った。それぞれが実験で、うまくいったことも、うまくいかなかったこともある。そのことはかりを考えているし、考えてしまう。とりとめもないと思う。せめて未来に生かさればと願うだけだ。すぐに考える時間もなくなる。新しい年がはじまったのだ。

あいまがわらず日本中を飛び回っている。這いずりまわっていると言ったほうがいいかもしれない。この数年、すこしでも道のある方へ行ったことのない場所へ、会ったことのない人々へと向かって活動した。どうしてだろう。人がそんなに好きなわけじゃないのに。誰かと話すのが得意な性格でもない。でも、知らない町で知らない誰かとすれちがうのが好きだ。声が聞こえた瞬間、その人の生活を、人生を想像する。そして、少しだけ分け与らしたような気がする。きつと僕はわがままだ。自分の人生だけでは足りないと思っている。だから僕は人と会う。その人の向こうに、自分が生きなかつた時間を眺めている。僕が芝居をつくる理由も、それと同じだと思う。

今年、僕たちは小豆島に行く。春から秋にかけて、島に滞在し作品をつくり発表する。僕自身はもう何度も島に渡っているし、昨年末には劇団員全員で小豆島を訪れた。僕らが滞在する予定の港は、神戸から3時間、船に乗って行く。



今年、滞在予定の小豆島 坂手港



この日坂手幼稚園を「港の劇場」にする



幼稚園の舞台に座るままごとメンバー



フェリーのデッキから

大きなフェリーに乗って空と水平線を眺めることが、僕のお気に入りになった。小豆島の夏はまだ体験していない。とても楽しみにしている。小豆島は想像してたよりも大きく、3万人も人が住んでいる。これは僕が生まれた町と同じ人口。それほど違いがあるわけじゃない。でも、島の景色は僕に考えさせる。

誤解を恐れず言えば、小豆島は、死にゆく場所だと思っ。別に小豆島だけじゃない、僕も死に向かっている。日本も、地球も、誰だつてそうだ。だから、僕たちは錯覚しながら生きていく。死は存在しないかもしれない。自分分は死なないかもしれないと錯覚しながら、させながら生きていく。でも、島ではそうはいか

なかつた。都市と地続きじゃないからかもしれない。たかさんの人やモノや情報は、錯覚を手助けしてくれていた。無限だと思いつまませる魔法があった。だけど、あの場所にいると自分がただの島にいることに気がつく。四国も、日本も、海に囲まれた島だと気がついてしまう。関係だつて、血縁だつて、自分の体だつて、すべてはひとつの島。

小豆島に若者は少ない。ここには人生の先輩ばかりがいる。だから、僕らの未来も想像できる。人の作ったモノの、人間の、先が見えてくる。子どもたちは、それでも笑っている。この港で最も眺めのいい場所は、墓地になっている。僕はそれを美しいと思う。この島で僕たちは何ができるだろうか。僕らにできるのは祭ではないだろう。過去への逆行でもない。たぶん未来を真摯に、彩ること。小豆島のプロジェクトは、今年の僕たちの大きな仕事になるだろう。

船の甲板で、波のしぶきを見ながら考える。ずっと場所を求めて動いていた。今年も場所を求めながら動く。だけど、いよいよ場所を作らなくちゃいけない。そうでなくては、僕たち自身もたなくなつてきている。飽きっぽい性格だからどうしようもない。これは冒険であり、船出になるだろう。着いた場所には何もなにかもれないし、途中で難破する可能性もある。だけど、この先に理想の場所があるのだと舵をとる。確信はない。潮の流れはそだと言っている。気がする。自信を持って嘘をつく。この方向で間違いない、帆を張れ。それがきつと船長のつとめ。

かつて、僕は、演出家と制作がいれば、演劇はつくれるんじゃないかと考えていた。でも、それは間違っていた。いま、僕が目指す方向には仲間が必要だと思っ。僕は、それを求めようと思っ。人に頼るのが苦手な僕が仲間と手をとることは難しいと思っ。けれど、別れの寂しさは覚悟しても良い年にやつととなつたんだと思っ。

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に「ドトミ」で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年「わが星」にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞。同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

ままごとへの挑戦状

多田智美

from 大阪

「ままごと」が「わが星」公演を観てきました。映像で何回も見たいけど、目の前で繰り広げられる世界は本当に素晴らしい。時間、空間、音、言葉、光、身体、すべてがびびりたりで、感涙やっぱり、コンテンツに最適なメディアでのアウトプットだから表現の強度が半端ない。」

これは、2011年5月7日の夜に書いた私のツイートである。2010年3月、大阪にある演劇BARにて「わが星」映像を見て以来、映像を見るために通い詰めた後の三重公演5月7日。自らメディアの内側に入り込むような体験に、なぜか涙が止まらず、演劇やメディアに対する考え方が一変した。「わが星」との出会いには、私の編集人生においても事件だった。その少し後の5月11日、柴幸男さんに初めてのメールを送っていた。大阪・北加賀屋にある千島土地株式会社の100周年記念誌での相談だった。「ワケワクするような、読みたくなる100年史をつくりたい」という少し変わった社史の依頼で、私は編集を担当。会社の歴史を伝えるとともに、100年という時間を感じ取ることができ、これからの100年に想いを馳せることができるような本にしたいと思えた。そこで、「わが星」を通して、時間・空間をひびとく飛越える体験を与えてくれた柴さんに、100年を紐解く物語をつくってもらいたいとお願ひしたのだ。彼は、大阪・北加賀屋のまちを歩いてみたり、時間について深く考えた。1年もの時間をかけて物語を紡いでくれた。そこに、大阪在住のイラストレーター・dannyによる絵が寄り添い、2012年夏世界中どこにも無い100年史が完成。舞台と誌面、表現の場は異なっても、何度読んでもグッとくる素晴らしい物語が誕生した。

2012年7月1日、三鷹市芸術文化センター1での公演「朝がある」では、その物語の根底にある思考がそのまま舞台に立ち現れた。また改めて、メディアに合わせて、最適な解を導きたす劇作家・演出家として彼の力量に唸った。と同時に、もっともっと今までに無い挑戦ががむくむく湧いてきた。

2013年、柴さんに、さらに新たな挑戦状を投げかけている。それは、瀬戸内国際芸術祭での16年ぶりに開港した小豆島・坂手でのプロジェクト。半年間かけて、どんな物語が生み出されるのか今から楽しみだ。

Tomomi Tada

編集者、editorial studio MUSEUM 代表。出来事が生まれる現場から、ドキュメンテーションまで、をテーマに書籍やWEB、展覧会およびイベントの企画・編集を手掛ける。

「ハートのビート」vol.04

宮永琢生「制作」

みなさんご無沙汰しております。宮永です。2012年12月8日19時46分。下北沢のマクドナルドで書いてました。ここまでは。2012年12月19日10時18分。神戸に向かう新幹線の車内で書いてました。ここまでは。12月24日23時58分。クリスマスイブのわが家で書いてます。メリークリスマス！ケンタッキーが食べたいZEE……………いやいやいや、年明けちゃったから！2013年きちゃったから！！

そんなわけで、2012年も我々「ままと」はたくさん「ままと」しました。はい。ご来場いただいた方もそうでない方も、この場を借りて心より御礼申し上げます。LOVE。



LABCRY 『LABCRY』

関西が誇る孤高のバンドマンである三沢洋紀を中心に結成されたLABCRY（現在活動休止中）の5th ALBUM。であり実質的な最後のスタジオ録音盤。であり大傑作の大名盤。みんな大好きイルリメパイヤンの「トリミング」とゆー名曲で、LABCRYの「ハートのビート」のイントロが使われていることでご存知の方も多いかと。

ちなみにいまさらですが、本コーナーのタイトル「ハートのビート」は、このアルバム1曲目に収録されている「ハートのビート」から引用させていただきます。感謝。

三沢氏は、現在横浜を中心にさまざまな名義でライブ活動を展開中。三沢氏に出会いたければ横浜へ。さて、そんなわけで、2013年も「ままと」はみなさんと出逢える事を心より願っております。LOVE。

「いわきのこと」第4回

端田新菜「俳優」

2011年6月ままとは、いわき総合高校で『わが星リーディング公演+地域7校演劇部対象ワークショップ』を実施しました。一カ月後、その7校による「演劇部合同発表会」を觀に行ったわたしは、いわき総合のいいさんに「うちの作品、県外でやりたいんだけど」と言われ、二つ返事で「わかりました」と言っておくことにしました。

東京公演をやることに決めました。面白いと思った。楽しいことを始めたぞと、いそいそと準備を進めました。しかし、そうやっていそいそ準備を進めるうちに、わたしの中で一つの難しい心配が、少しずつ大きくなっていったのです。

作品を作ることで、踏ん張る力、夢見続ける力をなんとか取り戻し高めてきた彼らに、この東京公演が躓きの石となってしまうたらどうしよう。

彼らが東京にやってくるのは12月。なんと言いますが、東京といわきの温度差というが、震災から9カ月という時間の、流れるスピードのようなものがきつといる。違うって、それを肌で感じて彼らが元気をなくしてしまったらどうしよう、それは、すごく嫌だな、だんだん悶々としてきました。

もちろん、観客と作品の出会いや、採算やら、ステージ裏の人員配置やらと、心配することはほかにもあるけれど、でもそんなのはまあ多分コソコソ丁寧によれば

「わたしの履歴書」

四枚目

大石将弘「俳優」

わたし先日30歳になりました。節目のようだった2012年とこれからの2013年、年は順調に重ねていくのに相変わらずわたしの履歴書の特技の欄は白紙のまま。いくらレベルをあげても呪文を覚えられない僧侶が何かなのよう。

自分にはできないかと自分だからこそとかいう特別なオンリーワン信仰を、思春期のころには持ちがち、持たされがちなのに、大人になるほど自分の図抜けたなさを知るばかりです。

どうやらなさそうな特別な何かに期待するのはやめて、せいぜい自分でもできることを、おそくはたいいてい誰にでもできるだろうことを、墨直に積み重ねることしかないのだなあとしきりに思った2012年。ただ走り続けて42キロちょっと走り切るみたいに。ただ歩き続けて山頂から景色を眺めるように。おおよそ前前にできることの積み重ねで、それだけを頼りに、成し遂げるまでの、ずっと途中。

当たり前前に生活を、日常を、全うすることが、当たり前前になくなりつつある世界で、なおかつ演劇っていう、なんかとんでもない人たちが生息するこの世界で、たとえば無能さや劣等感を、転じて武器にできるわけでもないくらいに凡能さで、特技の欄を白紙にしたまま、せいぜい自分にもできるありきたりを積み重ねていく生活を、また1年お送りしたいと思えます。それでは。



2011.12.23 バラシを終えたスタッフチーム

NEXT

■柴幸男・大石将弘

【柴：作・演出】【大石：出演】
I-Play Fes ～演劇からの復興～
いわき演劇まつり
『反復かつ連続』+『あゆみ(短編)』+
『つくりばなし』

2013年2月2日 [土]・3 [日]
@いわき芸術文化交流館
アリオス小劇場

東海支部プロデュース
「劇王X～天下統一大会」
『つくりばなし』

2013年2月9日 [土] -11[月・祝]
@長久手市文化の家風のホール

■宮永琢生

【ディレクション】
国際舞台芸術ミーティングin横浜2013
(TPAM in Yokohama 2013)
<<TPAMディレクション>>
杉原邦生『1/2PA ナイツ!』

2013年2月13日 [水]・14日 [木]
KAAT 神奈川芸術劇場 ホール

編集後記

第4号の準備は、年末から年始にかけて進められました。2012年暮れに訪れた小豆島はとても刺激的だったようで、その様子についてはまたあらためて。次号、第5号もお楽しみに。(熊井)

企画・編集=ままと
構成=熊井玲
デザイン=西山昭彦

ままとの2013年上半期

今年もままとは、日本全国で活動を行います。ここでは、現在発表されている2013年8月までの公演スケジュールをご紹介します！なお、すべての情報はままとHPでも随時アップしていきます。

2月

I-Play Fes～演劇からの復興～いわき演劇まつり
『反復かつ連続』+『あゆみ(短編)』+『つくりばなし』
2013年2月2日[土]・3[日]@福島
※I-Play Fes公式HP <http://iplayfes.exblog.jp>

4月

ままと+瀬戸内国際芸術祭
「港の劇場(仮)」@香川・小豆島
※瀬戸内国際芸術祭公式HP <http://setouchi-artfest.jp>

3月

ままと『朝がある 弾き語りツアー』
@北海道・宮城・大阪・三重 ほか
北海道舞台塾シアターラボ「タイトル未定」
@北海道

8月

ままと+あいちトリエンナーレ
「タイトル未定」@愛知 ほか
※あいちトリエンナーレ公式HP <http://aichitriennale.jp>



ままと+あいちトリエンナーレ